

■ 教育講演8

女性の漢方治療 ―不定愁訴を中心として―

福澤 素子（表参道福澤クリニック）

現在、多くの漢方専門外来では、患者さんの約7割以上を女性が占めており、女性の医療には漢方治療が欠かせないとの認識が高まっている。

女性は一生の間に月経、妊娠、出産、更年期などに伴ってさまざまな症状や疾患が現れる。冷えやのぼせ、肩こり、頭痛、めまい、浮腫、動悸、倦怠感などの身体症状だけでなく、イライラや抑うつ、精神不安、不眠などの精神神経症状が認められることも多く、時にはQOL（quality of life）の低下を招くこともある。

漢方では古来より、女性の月経、妊娠、出産に関連する症状や疾患の治療を重視して多くの有用な処方が考案されてきた。また江戸時代にはこれら女性特有のホルモンの変動に伴って現れる多彩な症状を「血の道症」と称するようになった。

血の道症にみられる多彩な症状は、西洋医学的には「不定愁訴」としてとらえられ、対応に苦慮することも少なくない。

一方、漢方は、一処方で複数の症状を改善することができ、心身両面の治療も可能である。このような漢方治療の特徴は、血の道症をはじめとする女性の多様な症状に対して非常に有用であり、女性のQOLを改善する。

ここでは女性特有の症状の中で、特に不定愁訴の漢方治療について、治療のポイントおよび頻用処方を中心とした方剤の運用について概説する。

略歴

1979年 慶應義塾大学医学部卒業
1979年 慶應義塾大学医学部内科学助手
1994年 慶應義塾大学病院漢方クリニック専任講師
2002年 慶應義塾大学医学部ツムラ東洋医学寄附講座助教授
2003年 表参道福澤クリニック副院長
慶應義塾大学病院漢方クリニック非常勤講師
現在に至る。